

日々積み重ねることや挑戦することの大切さ

道は邇(ちか)しと雖(いえど)も、行かざれば至(いた)らず。事(こと)は小なりと雖も、為(な)さざれば成らず。其(そ)の人と為りや、暇日(かじつ)多き者は、其の出入(しゅつにゅう)遠からず。 荀 子

今月は、中国の「春秋戦国時代」末期の儒教思想家、「性悪説」で有名な荀子(じゅんし)の言葉を取り上げてみました。大意は、「たとえ道は近くても、自分で歩いて行かなければたどり着けない。いかに小さな事でも、自分でやらなければ完成しない。性格が怠惰な人は、何をしても遠大な結果は得られない」(湯浅邦弘「荀子」角川ソフィア文庫より)となっています。

何か当たり前のことを言っているように思われるかもしれませんが、我と我が身を顧みても何かと理由をつけて、簡単なことでもなかなか手を付けないことはよくあることではないでしょうか。この言葉にあるように何か行動を起こさなければ、どんな成果も得られないことは確かなことです。

日本にも、この言葉と軌を一にする有名な言葉があります。それは、出羽国米沢藩第9代藩主上杉治憲(鷹山)の「なせば成る なさねば成らぬ 何事も 成らぬは人の なさぬなりけり」です。

実は、若い時はこの言葉の深意を十分理解できておらず、人間には、不可能なことがいっぱいあるのに何を言っているのかなどと不遜なことを思っていました。職場や社会、家庭生活など様々な人生経験を経て、この言葉の意味深さが理解できるようになりました。「もっとこうすれば良いのに」とか「こうした方がずっと良い結果がでるのに」と、多くの人が思っている、なかなかそうならないのは、結局「成らぬは人の なさぬなりけり」ではないかと得心したためでもあります。

例えば、仕事上で、何か新しいことを始めようとした時に、ありがちなこととしては、「そんなことやったことがない」とか、「そんなことしたら仕事に悪い影響があるのではないか」といったネガティブシンキング的な対応です。もちろん、それまでの仕事のやり方も一定の合理性があったわけであり、ある面でこうした対応が出るのもやむを得ないところもありますが、変化の激しい現代社会にあっては、それまでのやり方がまったく通用しないようになることもあります。何はともあれ、社会の変化を的確に捉え、変えるべきことは、しっかりと変えていくことが大事ではないかと思います。

また、職場でよくありがちな対応としては、仕事の内容などをあれやこれやと批評するような「評論家」になってしまうことです。我々は、与えられた仕事を遂行する「実践者」でなければならず、物事を客観的に考えることは大事ですが、その行動は、第三者のような態度ではなく、主体的に行わなければならない責務があるからです。

最後に、余談を一つ紹介します。元サッカーイタリア代表の名選手で、現役時代は、「ファンタジスタ」と呼ばれたロベルト・バaggio(Roberto Baggio)は、「PKを外すことができるのは、PKを蹴る勇気を持った者だけだ」と述べています。PKは、その結果だけに目がいきがちですが、挑戦し、実践することの大切さを説いた名言だと思います。

令和7年(2025年)6月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理 事 長 松 井 聡 明